

見城徹 編集者 魂の戦士

NHK「課外授業 ようこそ先輩」

見城 ぼくは、見城徹といいます。自分の名前が大好きなの。なんか芸名みたいでしょ。

七年前に幻冬舎という出版社をつくりました。その出版社から今までにもう一〇〇〇冊ぐらいの本を出していると思います。

それから、本には、「帯」というのがあるの

ね。この帯に文章を書くのは、編集者の大事な仕事です。帯によって、この本の内容の全部を言い表さなきゃいけない。本を買う人が「読みたいなあ」と思う文章を書く。**帯に書く文章のことを「コピー」とよんでいます。**帯をどんな色にするか、どういう書体を使って、大きさや並べ方をどうするか、全体のデザインを決めて、そうして本というのができあがる。これはけっこう楽しい作業なんだよ。

そんなふうにして、いっぱい本を出しているんです。

例えば、さっき郷ひろみさんの『ダディ』という本を見せました。彼は、離婚するということに対して、すごく苦しんでいました。ぼくは郷ひろみさんと一〇年以上のつきあいがありました。よく会っていたの。その間、郷ひろみさんと仕事をして何を本にしようかと、ずっと考えていたのだけれど、なかなか「これだ」というものが見つからなかったのね。そのうち、彼は離婚をしなければいけなくなってきて、そこで苦しんでいる郷ひろみさんを見て、「それを書きましょう、それを書いてください」と言いました。

そのことを切り出すタイミングとか、どんな言葉で言うとか、それはとっても微妙なものでしょ。やっぱり人に知られたくないことだし、本人が血を流すように苦しんでいることだから。

でも、そのことを書かないと、いい作品というのはできないんですね。だからぼくらは相手に対して接近しながら、何をどういうテーマでどうやって書いてもらおうかというのを、いつも考えながらつきあっているんですよ。その人たちをいっぱい刺激する言葉を投げていって、相手の反応を見ながら、うまく書いてもらうように仕向けていっているのです。それは、けっこうきつい作業なんですよ。

そういうことをして初めて、相手が書こうという気持ちになるわけだよね。それで書き始めてもらえたら、今度は、原稿がどんどんできてくる。それを「ここは、もう少しこのシーンを増やしたほうがいいんじゃないか」「こういう性格の人はこういうセリフは言わないでしょう」「この描写はちょっと余分だから取りましょう」「ここはもう少し色とか匂いとかを入れたほうが世界が広がるから、何か色か匂いを入れましょうよ」とか、いろんなことを言うんですよ。「この主人公の性格がよく見えないから、この主人公が何に驚いたのか、それをもう少し詳しく書いてみてください」とか。

それからやっぱり、褒めることもします。嘘で褒めてもしょうがないけれども、「ここはとってもよく書けています」とか、「ここはぼくも読んでいて感動しました」とか、いろんなことを言わなきゃだめなんだよね。

そうやって作者との関係が深まっていくわけです。単に「ここはだめだ」とか、「ここはいい」とか言うのではなしに、ちゃんと理由があって説得力のある言葉で言わなくちゃいけないんです。

そうやって一つの作品ができていって、それが世に出たときには、関係がもっと深まる。

書くということは、その人の劣

等感や願望や取り繕っているものや薄っぺらなものやぶ厚いもの、そういうものが全部出てしまうものだから、人にものを言うということは、自分もさらけ出して何かを言うことです。例えば嫉妬心がない人が、「君は嫉妬心が強いよ」とは言えないわけです。人にものを言うということは、常に自分が照らし出されることじゃないですか。嫉妬心のない人に他人の嫉妬心を指摘することはできないわけだ。

文章がうまかったり、文章の構成がとってもよくできていたり、そんな必要はぜんぜんないの。まず大事なのは、自分らしいということ。その人らしいということ。ほかの人が真似できないものがあればいい。それがいちばん大事なの。

二番目は、文章がいきいきとしていること。その風景とか情景が目浮かぶ。光とか匂いとか音とか熱というものが感じられる。風が感じられる。体でもって、その文章を受け止められる。ちょっと難しいことかもしれないけれども、とにかくいきいきと書いてあればいい。変に説明していないほうがいいと思う。

三つ目、文章に発見がある。これは、「あっ！ こんな感動があったんだ」とか、「こんな悲しさがあったんだ」とか、「こんな言い方があったんだ」という、何か新しい発見があるということ。

うまく書く必要なんかぜんぜんない。いびつでも短くても下手くそでも、どうでもいいと思う。この三つがあれば文章というか書いたものというのは、すごく人の心に伝わってくるの。

ぼくは、いつもこの三つを基準にして原稿を読んでいます。

ものを書くということは、そういうことだと思うの。やっぱり自分に

劣等感がなかったり、苦しいことがまったくなかったら、ものを書く必要はない。ものを書くというのは、どこかで、「ものを書かなければ救われない」と思っているから。ものを書くことによって救われたと思ったときに、きっといいものができているんだと思うんですよ。

編集者というのは、自分が感動しないと動けないんですよ。街でフッと聞こえてきた音楽や、電車に乗ったときにたまたま見た車内広告。それから偶然テレビで見た俳優さんとか、なんとなく本屋で手に取った本に引きつけられて、そこに入っていってしまう。感動する。そういう

ことがないと、これを編集してみようという情熱が湧いてこないじゃないですか。

感動しない限り、ぼくらの仕事というのは成立しないんです。感動しないものをやることぐらいつまらないことはない。せっかく生きているんだから、感動に出会ったほうがいいじゃないですか。感動に出会わない人生ほどつまらないものではなくて、感動すれば自分もまた変わるし、感動するという自分を自分のなかで知ったとき、とても人生が豊かになると思います。

ぼくは、プロの人たちと仕事をしているわけですよ。そうすると、かなり文章というものの、表現というものに対して、そうとうなレベルのものに接しているわけじゃないですか。そういうものには、こっちにしても直し**甲斐がある**わけですよ。

「この人間の描写はぜんぜん入ってこないから、この人の癖を一つ二つ入れてください」とかね。「この人は何色が好きなのか」「コートの色は何色にするのか」ということをちゃんと伝える。「ここは青がとってもいいと思うから、青にしてください」とか。「この人が繊細なのはよくわかるけれども、もっと繊細さを出すために、フランス料理を食べているシーンで、精神安定剤をバックから女の人に取り出して一錠飲む、そのシーンを入れてください」「いや、それをナイフでもって半分に割って飲むほうがもっと繊細さが出るんじゃないですか、どうでしょう」「ウェイトレスが出てきて、ポンとテーブルにコーヒーを置くときに、Tシャツがまくれてヘソが見えたと書いてありますが、『縦長の』と三文字を入れたほうが、その人がバツと見える感じがしませんか」とか。そういうことをぼくらは言うわけですよ。

編集者というのは、変わった人にしか興味がないんですよ。ふつうにしているもの、どこかではみ出しちゃうものがある。こぼれ落ちちゃうものがあるから、人は表現するんでね。絵を描いたり音楽をつくったり文章を書いたりする。表現することによって、どこかで自分が満たされる、救われるということがあるのです。

人には触れられたくないことがある。「ここはちょっと書くのが照れくさいな」とか、「これを書くのが恥ずかしいな」とか思って、やめているものがいくつもあるんですよ。だけど、そこを書いてもらわないといいものはできないんですよ。相手の持っている**あんまり見せたくない部分**、ぼくらの言い方で言えば、アザとかカサブタとか膿とか。そういうカサブタを引き剥がして、そこに塩を塗り込んだりする。「ここを書かなきゃいけないんじゃないの。ここを書かないで通り過ぎて行くことはできないんじゃないの」ということを、いつ言うか、タイミングをうかがっているわけですよ。

でも、それを言って相手も応じてくれるためには、こっちも何かをさらけ出さなきゃいけない。こっちの体重のかけ方が相手に伝わらなければ、相手だって、そっちは調子よく生きていて、相手にだけ、カサブタとか膿みたいなものを出してくれと言ったって、それは当然できないわけです。関係が濃密になっていなきゃあ、そんなことは起こらないわけです。そういうこ

とができるようになるために、ぼくは人とつきあうわけだね。それは、内臓と内臓がほんとにこすれあうという関係をつくれるかつかれないかという勝負なんですよ。

編集者というのは、そういうオリジナルな世界を持っているものを見つけてきて、それを今度は完成品にするために、少し補助線を引いてあげたりブラッシュアップしたり、書き直してもらったり、プロデュースしたりというのが仕事でしょう。欲張りだから、Aという世界にもものすごく感動するし、Bという世界もものすごく感動するし、CもDもEにも感動するんですよ。編集者をやっていたら、全部にかかわれるじゃないですか。

自分で書いていると、一つの世界、ぼくだけの世界じゃないですか。自分の世界というのは、器用にAの世界、Bの世界、Cの世界、Dの世界と書き分けられるかということ、人というのはそんなもんじゃないわけですよ。人というのは、やっぱり一つの世界しか書けない。それはオリジナリティのある独自の世界だから、そんなものが三つも四つもあつたら、それは偽物なんですよ。

だからぼくは、表現者の触媒として相手を刺激して、その世界をつかみ出してくるという方向に自然と行ってしまったんです。それから、劣等感とか独占欲とか猜疑心とか、いろんな意味での負の感情、暗黒の心理というのがぼくはすごく強かったから、そういうことに敏感なんですよ。だから、人のそういうこともよくわかるタイプなんです。そこにグサッと言葉を刺していくわけですよ。そうすると向こうも反応するじゃないですか。それがすごく面白くなったのね。だいたいぼくは、人が経験する暗黒の感情というのは全部経験してきたつもりだから。

大学を卒業してから二年間ぐらい、自分も小説を書きたいと思ってぶらぶらしていた時期がある。そういうときに中上健次とか高橋三千綱とか立松和平とか、つかこうへいとか、そういう人たちと酒場で偶然知り合った。やっぱり、彼らには彼らにしかない世界があるんですよ。自分は、彼らを見ていると本物じゃないなと思うんですよ。「ああ、おれはやっぱり偽物だな」と思うわけです。

二行目、「きれいだなんて感じるからだ」というのも、きれいだなんてことを表現するために、詩にしたんだろ？ それなのにきれいだなんて言っちゃつたら、もうおしまいじゃない。